

磐石城商工時報

石城現勢號

自然の恩恵に浴す 石城産業の開拓

古來より本郡は
文教地として知らる

明治二十八年日本鐵道布設され本監督所、平區裁判所、平稅務署より平町の發展は逐年向上し、署、平警察署、平小林区署、福更に大正六年警越東線延長する島形務所支所、水戸專賣局平出、るや平町の繁華は益々知られ、張所、平郵便局、平機關庫等、に大平市建設の基礎を造るに至つたのである。

豊産無比

の磐城炭は殆んど全國に搬出され一躍炭坑の石城として天下に其名を知られたのである、入山炭礦を始めとして、磐城、古河、三井、小田、福島、の各炭礦の外幾多の群小炭礦存在して、石城の經濟を支配するもの決して少なくない、平町は本郡の中心都會として面積東西二十五丁、南北十九丁、人口年々増加し明治廿四年九千六百二十二人であつたが、大正六年には二萬八百十四人に達し、十五年には實に二萬五千四百七十八人に及んでゐる、戸數も明治卅四年に一千九百一十戸に過ぎなかつたものが大正十一年には四千六百四十二戸に達してゐる、各官衙としては、元し、殊に燈臺附近の海岸は風景郡役所跡に本縣吏員出張所、土に富んでゐる、豊間、平間の軌

磐城の名所舊蹟

地方に知られる
交通機關の完備
向上して行く磐城地方

▲鹽屋崎燈臺 これに依道布設も漸く實現する端緒を開いたが、本月下旬より平より豊間の自動車運轉する事になつてゐるから便宜になるであらう、同村には又沼ノ内辨財天の作者不明の立像あれど刀痕頗る鮮かにて雲慶の作なりと傳へられてゐる。

▲小名濱海水浴場 平小鐵道も商港實現する日も近

月三回發行 五五五五
發行兼編輯人 伊藤人
渡邊 源吉
福島縣平田町二番地
磐城商工時報社
廣告料 五割五折 電話二行
計費場所指定 電話二行
新聞定價 一部金五錢
二部金五錢 三月五錢

平銀行、警越銀行、磐城實業銀行其他農工、七十七、百七の支店がある、更に教育機關は縣下に殆ど比類なく完備し、縣立警越中學校は明治二十九年建設以來毎年生徒數が増加し、現在では學級數の多い學藝園に有名である、其他磐城高等女學校、平商業學校、私立佐賀學舎、同警越青年學校、警城訓育院

▲平陽實科 女學校、藤田裁縫女學校等ありて石城文化の向上に貢獻する点尠なからず、生産方面を見れば、生糸、真綿、地綿木綿、打綿、複製綿、雨傘、下駄、皮細工、弓矢、菓子類、ナイダー、ラムネ、清酒、醬油、味噌、饅頭、竹行李、白煉瓦、米、雜穀等である。

▲新舞子 大浦村仁井田海岸地帯の總稱にして、東日の日本百景中に當選した名勝地である、白砂雪の如く翠松林をなす往時平城主安藤侯は此の地に莊園を營み風光を愛でたといふ。

▲勿來關趾 郡南にある北約二里大浦村長友長隆寺境内にあり、貞享三年七月此地に安置したものである、木像一軀は明治四十年國寶に編入せられた作願の優秀稀に見る所であると展の域に進むであらう。

▲湯本温泉 附近炭礦の掘鑿により温泉の涸渇を見るに至つて衰微の徴候があつたが近年ポンプに依りて湯湯し相當の設備を講じたので夏季中は温浴には最も適してゐる、附近には入山炭礦あり、水道問題も解決したから同町民は勿論入山炭礦の飲料水も豊富になるであらう

▲関伽井嶽藥師 警越東線赤井驛を去る一里半関伽井嶽頂上にあり海拔二千四百尺、風に靈驗の顯赫を以て遠近に知らるる、龍燈の奇跡は古來著名である。

▲野田玉川 湯本より東方廿町許り玉川村野田の南を流る、我國六玉の一と稱すれど今僅かに細流を通ずるのみ、されど地形尚能因の歌意を想ふべし又古歌に所謂緒絶の橋は昔野田の玉川に架する所と言ひ傳へる。

▲磐城富士 一名絹谷富士ともいふ、平を去る北方二里草野村絹谷にあり、山勢宛ら芙蓉に似たるを以てこの名あり。

▲長友地藏堂 平を離る北約二里大浦村長友長隆寺境内にあり、貞享三年七月此地に安置したものである、木像一軀は明治四十年國寶に編入せられた作願の優秀稀に見る所であると展の域に進むであらう。

▲雄飛せんとする 福島炭礦事務所は菊地徳太郎氏に至つて幹部連成績を挙げやうとして努力を續けてゐるが同炭礦は警越東線に浴ふ小川驛より西方を離る、事約二十丁の地点にある、同炭礦は常磐炭界に於ける大炭礦として知られ、雄飛せんとする準備時代である、菊地礦長は探炭部長を兼ね係員の指揮監督よろしきを能率の向上を計つてゐる、従業員六百八、一日の採炭量三百噸以上に達してゐる、庶務課長大角金藏氏は温厚篤實の人、頗る敏腕家である、經理課長熊谷庄太郎氏は亦事務的才幹あり殊に會計事務に手腕あり、出納の整理確然として一般従業員より信頼されてゐる、尙五十余の役員は一致各課長を補佐し従業員も亦係員の指揮監督を重んじ同炭礦の向上を期してゐるから益々發展の域に進むであらう。

▲世間から評判される 太腹な小田吉次氏 十五萬圓を辨償した

裸一貫より身を起して炭礦王と當つて磐城銀行より債務十五萬圓は小田氏責任上當然支拂はばねならずといふので、小田氏は一般株主に對する責任感から十五萬圓を投じて今日になつたが、炭況不振の今日一時會社を隠退して萩原申八氏に社長を譲り小田氏個人の隅田川炭礦を經營してゐるが、愈々小田炭礦會社を辭するてゐるといふ。

雄飛せんとする 福島炭礦 同炭礦は警越東線に浴ふ小川驛より西方を離る、事約二十丁の地点にある、同炭礦は常磐炭界に於ける大炭礦として知られ、雄飛せんとする準備時代である、菊地礦長は探炭部長を兼ね係員の指揮監督よろしきを能率の向上を計つてゐる、従業員六百八、一日の採炭量三百噸以上に達してゐる、庶務課長大角金藏氏は温厚篤實の人、頗る敏腕家である、經理課長熊谷庄太郎氏は亦事務的才幹あり殊に會計事務に手腕あり、出納の整理確然として一般従業員より信頼されてゐる、尙五十余の役員は一致各課長を補佐し従業員も亦係員の指揮監督を重んじ同炭礦の向上を期してゐるから益々發展の域に進むであらう。

雜誌・書籍・百貨 (特價品) 海帽・海着・海水靴
平 德 帕 特 尼 斯 托 斯 特 一
平 驛 前 電 話 六 番
(高 級 化 粧 品 特 約 販 賣 店)